

熊本地震支援活動 現地活動報告(1日目)

一新会本部

○活動内容

- ・市内視察
- ・被災者の方(視覚に障がいをおもちの方)とその息子さんに、話を伺った。

○活動詳細

〈災害発生時の状況について〉



〈○活動をして分かったこと、○感じたこと〉

○常に災害に対応するため、小さいことの積み重ねや、住んでいるところを知ることなどが大切だとおっしゃっていた。
◎最近、熊本地震に関する報道が少ないので、僕は十分復興に近づいていると思っていたけれど、濁った水しか使えなかったりするなどいまだに、震災の影響が大きく残っていた。テレビや新聞の内容以上に鮮明に災害発生時の状況や恐ろしさが分かった。

〈私たちにできること・心がけること〉



〈○活動をして分かったこと、○感じたこと〉

○災害発生時、地域の人にとっても助かったという話があった。地域で助け合うことは当たり前のようで信用がなければできない。だから、普段から挨拶やボランティア活動を行っていく。
◎今までの自分にとって『地震』とは遠い存在だったけれど、いつ発生するか分からない恐ろしいものだと感じた。だから、普段からきっちりと『安全を確保する方法』や『避難経路』などを確認しておきたい。

○1日目の活動を終えて、感じたこと、考えたこと

この1日目の活動を終えて、僕が最も感じたことは『人とのかかわり』の重要性です。例えば、普段挨拶しているだけの人が災害時声をかけてくれたという話がありました。そこで、心配してくれる仲間がどれほど大切なものか学びました。また、救助活動をしたりすることは無理だけれどお年寄りの話を聞いたり中学生だからこそ、できることがあるのではないかと考えました。

熊本地震支援活動 現地活動報告(2日目)

一新会本部

○活動内容

- ・避難所に避難されている方々とのお話，うちわ配り
- ・避難所のお風呂掃除
- ・仮設住宅でのうちわ配り
- ・山間部のお宅を周りながらうちわ，フリーペーパー，チラシ配り

○活動詳細

<避難所の方々との交流>



<○活動をして分かったこと、○感じたこと>

○避難所は1人1人のスペースがあまり広くないなど，決して満足できる環境ではなかったが，お互いに協力しあって生活していた。
○活動をしている中で，避難されている方の笑顔を目にすることができ，“心の復興”は進んでいると感じた。

<うちわ，フリーペーパー，チラシ配り>



<○活動をして分かったこと、○感じたこと>

○避難所に住みながら，昼間は家の片付けをしているという人もいた。御高齢の方は，崩れた瓦の片付けなどの力仕事ができずに，少し困っている様だった。
○私達を温かく迎え，気さくにお話をしてくれた。うちわを渡したときにとても喜んでくれて，嬉しかった。

○2日目の活動を終えて，感じたこと，考えたこと

2日目は現地の方とお話する機会が多くあった。その中でこれからの生活について不安な事を聞き，これからはどのような支援をしていけば良いのか考えることができた。生活環境が整わないなど，課題は多く残っているように感じた。しかし，被災者の方々はボランティアの人たちに明るく接して下さり，逆にこちらが元気をもらった。継続的な支援をしていきたい。

熊本地震支援活動 現地活動報告(3日目)

一新会本部

○活動内容

- ・熊本市内でボランティア活動（地震で被害にあった家の片づけ）
- ・益城町視察

○活動詳細

〈被災家屋の復旧作業〉



〈○活動をして分かったこと、○感じたこと〉

- 地震と大雨の影響でタンスや引き出しの中に大量の水が溜まっていた。
- ガラスの破片が散乱していたり、天井の一部が剥がれ落ちていて、とても危ない状況だった。
- 室内がとても暑くなっていた。
- ◎地震の被害も大きかったが、大雨の被害も大きくて、片付けるのがすごく大変だった。
- ◎片づけをしていて、正直すごく暑くてすごく疲れた。被災地を支援するボランティアの人たちはいつもこんなに大変なことをしているのだと身をもって感じた。

〈益城町の状況〉



〈○活動をして分かったこと、○感じたこと〉

- どこを見てもがれきの山だった。
- 原形をとどめないほど家がつぶれてしまっていた。
- 人はほとんど見られず、がれきの撤去をしている様子はなかった。
- 電線が切れて下に垂れていて危なかった。
- ◎自分はあるほど地震の被害にあった家を実際に見ることは初めてだったけど、本当に心が苦しくなった。
- ◎あの一瞬の地震であれほどまで家がつぶれてしまったかと思うと地震の規模が図り知れない。
- ◎あれほどつぶれた家があるのに、がれきを撤去している様子もなかったのだから、まだそこまで手が足りていないのだと思った。

○3日目の活動を終えて、感じたこと、考えたこと

地震の被害にあった家に初めて入ったので大きな衝撃を受けた。玄関からガラスの破片が散乱していたり、食器棚やタンスがそのまま倒れていたりし、地震がどれだけ大きなものでどれだけその人の人生を変えてしまったのかを実感することができた。益城町の視察では一言では表せない悲しみや怒りが湧いてきた。熊本のことを思い、今まで学校でも現地でも頑張ってきたので、支援活動をする前にテレビで被災地をみたときより心が苦しくなった。

熊本地震支援活動 現地活動を終えて

—新会本部（横山優太）

〇感想

3日間という短い時間だったが、充実した活動ができたと感じている。視覚障害のある被災者の方とのお話，避難所・仮設住宅で暮らしている方々とのお話，避難所のお風呂の掃除，うちわ配り，被災した家屋の片付け。これらの活動の全てが意味を持っていて，少しでも役に立てたことを誇りに思う。現地の悲惨な状況を自分の目で見て，辛い事もあった。しかし，言い方は悪いかもしれないが，熊本に行くことができて本当に良かったと感じている。テレビ，インターネットの情報だけでは本当のことはほとんど分からない。自分の目で被害の現状を見て，いろいろな事を考えることが一番大事だと思う。でも熊本に行くことができたのは一生懸命に準備してくださった先生方や現地に同行して頂いたコーディネーター，温かく送り出してくれた保護者のおかげであって，本当に感謝している。これからの人生を過ごしていく上で大事なことを多く感じる事ができた。これからは，熊本で学んだことを全校，地域へと発信していく。そして，1人1人が「自分は何ができるのか」という事を考え，地域の防災の第一歩となるように活動していく。



熊本地震支援活動 現地活動を終えて

—新会本部（伏見 晴菜）

〇感想

私はこの三日間でたくさんの経験をしました。被災された方の生の声をお聞きすること、避難所へのボランティア活動、被害地の視察、これらは今後の人生の中で、なかなか経験できないことでした。このひとつ一つの経験から私はたくさんのことを学びました。その中でも特に、私と同じ中学生の皆さんに伝えたいことが二つあります。

一つ目は、「人との関わりは本当に大切」ということです。このことは特に、一日目の被災された方の話を聞いているときに感じました。その方は、「自分が登下校するとき、地域の人に何気なく挨拶をしていた。そして地震が起きた後、ただ挨拶をしただけの関係なのに、たくさん声をかけてもらった。」「避難したとき、地域の知っている人がそばにいるということだけで、少しは安心できた。」と話してくださいました。普段から、自分の地域と関わっていくことで、もしもの時、お互いの心の支えになることができるとおもいます。今、私たち中学生ができることは、地域の人により積極的に挨拶をしたり、地域の行事などに積極的に参加をし、地域とのつながりを更に強くしていくことだと思います。

二つ目は、「当たり前で生活できることのありがたさ」です。被災地や仮設住宅を訪問した時に、入居者の人たちが笑顔で私たちと関わってくださったことを覚えています。あれほどまで、自分たちの故郷を、大切な日常を壊されたにもかかわらず、それでも、少しずつでも前に進んでいこうという姿勢に心を打たれました。私たち自身はどうでしょうか。やりたいことをやって、寝たくなったら寝れば当然のように明日がまたやってきます。それが私たちの「当たり前」です。しかし、地震で被害にあわれた人たちにとっては、「今を生きれる」それだけでも幸せなのです。私たちにとっては「当たり前」のことでも、地震で被害にあわれた人たちにとって、それはとても幸せなことなのです。私たちが今、自由に生きていられるのは、幸せなこと。食べたいものを食べ、会いたい人と会える、それは本当に幸せなことです。だから私たちは、たとえどんなことがあっても自分がいる立場を一度思い出し、今ある「当たり前の日常」に感謝することが大切だと思います。

今回の活動では、熊本の現状を自分の、目で、耳で、心で感じてくることができました。熊本で学んできたことを、自分の日常に生かしていきたいと思っています。

最後に、この活動に関わったすべての方々に心から感謝します。ありがとうございました。



熊本地震支援活動 現地活動を終えて

—新会本部（石崎 翼）

〇感想

今回白新中学校の代表として、3日間という短い期間ではありますが熊本に行ってボランティア活動を行ってきました。現地での活動はどれも「熊本に行かなければできなかった」というものばかりでした。現地の人との会話で『新潟からボランティアに来た中学生です。』といったとき、僕は正直『新潟からわざわざ何をしに来たんだ!』と怒られたり、嫌な態度をとられたりするものだと思っていました。しかし現地の方は、驚いて感謝の言葉を返してくれたり、うれし涙をして喜んでくれたりしました。また、避難所などで被災者の方々の話を聞いているだけでも僕たちが必要とされているという想いを抱くことができました。つまり、それだけ中学生という存在の大きさを感じました。

1日目の活動で、避難所の仮設浴場の清掃がありました。だいたいの仕事が終わって僕は満足していました。しかし、指示を出されている方から『そこやって』とさらに細かいところまでしっかりと掃除するという指示を受けました。ここで、僕は「ボランティアは自分が満足するだけではいけない」と思いました。

3日目の活動では、被災者の方の家掃除・ゴミ捨てを行いました。外から見て大丈夫でも、中はぐちゃぐちゃだったり大雨の影響でタンスに水が溜まっていたりして驚きました。新潟での、新聞などの報道だけでは知らないことを実際に自分の目で見て、熊本の復興にはまだ時間がかかると感じました。

この3日間で、言葉では伝えられないものを体験して目で見て感じることができました。あくまで今回の活動は、「熊本の継続的な支援」を行うためのものです。ここで終わってしまったら意味がありません。だから、この熊本から持って帰ってきたものをこれからの活動に生かしていきたいと思います。

最後に、今回熊本で貴重な体験ができたのは、募金をしてくださった小学校のみなさん・地域の方々のみなさん・先生方・生徒の方々のみなさん・同行者の方々・現地の方々のおかげです。本当にありがとうございました。

